

前2世紀前半のローマによる 対ギリシア外交の再考察 ——上級公職者の考察を中心に——

比 佐 篤

序 論

前2世紀に入って、ローマは本格的にギリシアへの介入を行っていったとされる。最終的には、第4マケドニア戦争の後には、ギリシアはローマの支配下に入ったとされている。この時期のローマによる対ギリシア外交がいかなるものであったのかについては、現在に至るまで様々な議論が行われてきた^①。それゆえに、様々な説が存在するのであるが、当時のローマにとって対ギリシア外交が重要であったという考え方は、殆どの説に共通している。確かに、ギリシアで戦争を行ったこと自体が、積極的な意思の表れであると言えるのであろうが、このことは当時のローマが対ギリシア外交を重要視していたことを、単純に示すものなのであろうか。

ところで、ローマはギリシアにおいて戦争を行う際に、軍隊指揮権を持つ上級公職者を派遣したわけであり、これらの上級公職者を考察することは、当時のローマによる対ギリシア外交を見ていく上で重要なことである。だが、個々の公職者に関する研究は行われていても、当時ギリシアに派遣された公職者を総体的に扱った研究は管見の限り殆ど存在せず^②、それらも当時ギリシアへ派遣された使者を含む研究であり、純粋に上級公職者のみを扱ったものではない。

そこで本稿では、第2マケドニア戦争が開始された前200年から、コリントの破壊を行った前146年までの前2世紀前半における、ギリシアへ派遣された上級公職者の検討を行うことによって、ローマの支配者層による対ギリシア外交における、積極的な意志の存在の有無について検証していきたい^③。

まず第1章では、前2世紀前半の上級公職者の任務地を検証して、第2章では、その中でギリシアを任務地とした上級公職者の考察を行いたい。これにより、前2世紀前半のローマには、ギリシアに対する積極的な関与の意志が欠けていたことを明らかにしたい。最後に第3章では、そのような状況の中で行われた、個々のローマ人による積極的な対ギリシア政策の意味について考察してみたい。そして、当時のギリシアでの積極的な外交活動は、個々のローマ人たちによってローマの政界で伸長するために行われたことを明らかにしたい。

第1章 前2世紀前半における上級公職者の任務地

本章では、前2世紀前半の上級公職者の任務地provinciaを考察することによって、当時のローマの支配者層が、どの程度ギリシアに積極的に関わろうとしたのかについてみていきたい^④。

まず、上級公職者の総数を算出する必要がある。

本稿が考察を行う、前200年から前146年までの55年間の上級公職者の総数は、コンスルについては明白であるが、プラエトルに関しては不確定な部分がある。コンスルは間違いなく毎年2人ずつ選ばれたため、総数は110人になるが、補充コンスルconsul suffectusが前180年と前154年には1人ずつ、前162年には2人存在していたため、合計は114人になる。

プラエトルは前198年までは毎年4人、それ以降は毎年6人ずつ選ばれることになったのであるが、前179年のように4人しか選ばれなかったことがあったかどうか、前166年以降に関してはリウィウスの史料の散逸によりわからないため、確実に算出することはできない。ただし、前180年には補充プラエトルpraetor suffectusが1人存在していた。仮に、前166年以降も毎年6人ずつ選ばれたとするならば、プラエトルの総数は323人になる。

これらの上級公職者の任務地のうち、前200年から前166年までは、リウィウスの史料によってほぼ正確に判明する(別表1, 2参照)。これによれば、コンスルの内でギリシアを任務地とした者は14人にすぎず、プラエトルの内でギリシアを任務地とした者は、海軍を受け持った者を含めても11人にすぎない。

それ以降は断片的にしか史料が存在しないために完全には判明しないが、第2マケドニア戦争が開始された前165年から、コリントを破壊した前146年までに、ギリシアを任務地とした上級公職者は、確認しうる限りではコンスルが3人、プラエトルが2人だけである^⑤。

これら全てを合計すると、ギリシアを任務地とした上級公職者はコンスルが17人、プラエトルが13人にすぎない(別表3参照)。つまり、ギリシアを任務地とした上級公職者の人数を見る限り、ローマの支配者層がギリシアに対して積極的であったとは考えにくいのである。

さらに、ギリシアを任務地とした上級公職者の中には、厳密な意味でギリシアを任務地としたとは見なし得ない者が存在する。先に見たように、前2世紀前半に、ギリシアを任務地としたコンスルは17人であり、プラエトルは13人である。しかしながら、前181年のプラエトルと前178/177年の3人のコンスルはギリシア北部のイストリアを任務地としているが、これは南イタリアのタレントゥムや、ブルンディシウムの要請によって行われた海賊征伐が主たる活動

であり、厳密にはギリシアを任務地にしたとは言い難い^⑥。

加えて、ダルマティア戦争に従軍した前156/155年の2人のコンスルの任務地はダルマティアであるが、これはイタリア北部の防衛という性格が強かったものであり、純粋な対ギリシア外交とは言えない^⑦。

以上の考察から、前200年から前146年までのコンスル114人とプラエトル323人のうち、厳密な意味でギリシアを任務地としたコンスルとプラエトルは、それぞれ12人ずつしか存在しないと言うことができる。

これに対して、別表1，2から明らかなように、前166年までにイタリアを任務地としたコンスルの数は、ギリシアを任務地としたコンスルの約3倍であるし、両ヒスパニアを任務地としたプラエトルの数は、ギリシアを任務地としたプラエトルの約4倍である。ギリシアにおいて戦争を行っていることは、ローマの支配者層が、ギリシアに対して何らかの重要性を見出していたことを示すことも事実であろう。しかしながら、上級公職者への任務地の割り当てから見る限り、ギリシアよりもイタリアやスペインでの活動を重要視していたことが見て取れるのである。

それでは、上級公職者が少数しかギリシアに派遣されていなかったとしても、彼らはローマの支配者層によって意図的にギリシアへと派遣されたのであろうか。つまり、それによって、ローマの支配者層はギリシアへの積極的な介入を行おうと考えていたのであろうか。

次章では、これらのことについて考察してみたい。

第2章 ギリシアを任務地とした上級公職者

前章において、ギリシアを任務地とした上級公職者は、前2世紀前半の上級公職者全体のうちで、決して数多く存在していなかったことを明らかにした。本章では、個々の公職者の考察を行い、ローマの支配者層が、積極的な意志を持って彼らを派遣していたのかについて見ていきたい。

そもそも、任務地の割り当てはくじによって割り当てられていた^⑧。従って、コンスルもプラエトルも、任務地としてギリシア以外の地を割り当てられる確率が、少なからず存在していた。別表3から明らかなように、ギリシアを任務地としたコンスル17人のうち、同僚もギリシアであったコンスルは前189年と前178年のコンスルであった4人にすぎず、その他の13人は、ギリシア以外を任務地とする可能性があったのである。

加えて、ギリシアを任務地として受け持つ前に、ギリシアでの活動経験のある上級公職者はそれほど多いわけではない。つまり、ギリシアへ上級公職者を

派遣する殆どの場合において、ローマの支配者層が特別な配慮を行っていなかったことは明らかであろう。それでは、上級公職への就任以前に、ギリシアでの経験があった人物の場合はどうであろうか。

前章で考察したように、厳密な意味でギリシアを任務地としたコンスルは12人であるが、その中で、コンスル就任以前にギリシアにおいて経験を積んだと史料で確認しうる者は、前200年のP.スルピキウス＝ガルバ、前190年のL.コルネリウス＝スキピオ＝アジアティクス、前169年のQ.マルキウス＝フィリップス、前168年のL.アエミリウス＝パウルスの4人のみである。だが、この4人でさえも、ギリシアでの経験を生かすことを期待されて、任務地としてギリシアを任されたわけではないと思われる。

P.スルピキウス＝ガルバは、前210年から前206年までマケドニアにおいてプロコンスルをつとめ、第2マケドニア戦争を開始した前200年に、コンスルとして再びマケドニアを任務地とした。ガルバのギリシアでの行動を解釈する説として、第1マケドニア戦争において、ガルバにギリシアでの経験を積ませることをローマの支配者層は目指し、その経験を第2マケドニア戦争で役立てようとしたとする説は数多く存在するが^⑨、決してそうではない。確かに、ガルバはプロコンスルとして5年間ギリシアにいた。しかしながら、その時期は第2ポエニ戦争の時期であり、ローマが優勢であったとしても、前207年のメタウルスの戦いにおいてローマが勝利するまで、危機的状況が去ったわけではなかった。つまり、元老院はギリシアよりもイタリアを重視していたのであり、さして重要性のないギリシアをガルバに任せておいたにすぎないのである^⑩。

また、前200年にコンスルに就任したときも、ギリシアの専門家として活躍することを期待されていなかったと思われる。と言うのは、翌年には新しいコンスルがマケドニアに送られてきて、ガルバはローマに帰国しているからである。しかも、その新しいコンスルであるP.ウィリウス＝タッブルスは、それ以前にギリシアに赴いたことがない人物であった^⑪。

前190年のコンスルであるL.コルネリウス＝スキピオ＝アジアティクスは、リウィウスによれば、前年のテルモピュライの戦いにおけるローマ軍の勝利を、ギリシアからローマに伝えたとされている^⑫。けれども、彼はこの経験ゆえにコンスルに選ばれたわけではない。確かに、L.スキピオはくじによってではなく、元老院の直接の任命によってギリシアを任務地として割り当てられている。しかしながら、それは、彼の兄であるスキピオ＝アフリカヌスも一緒に従軍することによって、当時シリアにいたハンニバルに対抗することができると元老院が考えたためであり^⑬、L.スキピオのギリシアでの経験が決定要因になったわけではないからである。加えて、彼はシリアにおいて公職延長を行おうとしたが、元老院に拒否されているのであり^⑭、これらのことから、L.スキピオが

東方での経験を生かすことを元老院が期待していたとは思われない。

前169年のコンスルであるQ.マルキウス＝フィリップスは、コンスル就任以前に何度もギリシアへと赴いたことのある人物である。彼は前183年と前172年には使者としてギリシアへと赴いているし、前171年にはギリシアにおいて従軍もしている。こうした経験ゆえに、彼は前169年にコンスルとしてマケドニアを任務地として割り当てられたのであろうか。

確かに、フィリップスは前183年にギリシアへと派遣されているが、彼がローマへ帰ってきて元老院で報告したことは、元老院のギリシアに対する政策決定において無視されている^⑮。また、前172年には使者として、前171年には兵士として従軍したことは事実である。しかしながら、第3マケドニア戦争期に派遣された使者や従軍した者の中で、上級公職者に就任した人物は何人も存在するが、任務地をギリシアとしたのは彼と、前168年のプラエトルであるCn.オクタウィウスのみである^⑯。つまり、彼のギリシアでの活動やギリシアでの経験が、特別に重要視されていたようには思われないのである。

彼はギリシアでの豊富な経験を持つ人物であるが、前188年にはプラエトルとしてシチリアを受け持ち、前186年にはコンスルとしてイタリア全土におけるディオニュソス信仰の弾圧と、リグリア征伐を行っており、軍事・政治の経験そのものが豊富な人物であった^⑰。前169年当時には、第3マケドニア戦争においてローマは劣勢に立たされており、実戦経験を持つ指揮官が必要とされていたことが推測しうる。そうした経験豊富な指揮官としてフィリップスが選ばれたのであり、彼のコンスル就任は、ギリシアでの経験よりもむしろ軍事経験こそが重要視された結果ではなかろうか。

この当時に必要とされていたのは、ギリシアでの活動経験がある者よりも有能な指揮官であったことを証明する人物が、翌年の前168年のコンスルであるL.アエミリウス＝パウルスである。フィリップスと同様に、パウルスもコンスルの経験もある軍事経験の豊富な人物であり、第3マケドニア戦争の苦境を打破する人物として期待されてコンスルに選ばれている^⑱。パウルスはシリア戦争の事後処理にあたる十人委員会の一人としてギリシアに赴いたことがある^㉑が、それは前168年にコンスルに就く20年以上前の前189年のことであり、コンスル就任当時のギリシアの政治事情に関する知識が特にあったことも、そのようなことを期待されていたことも史料では確認できない。それどころか、L.パウルスと共にコンスルに選ばれたC.リキニウス＝クラッスは、前171年にマケドニアで従軍経験があり、当時のギリシアの事情に詳しくはたらずであるにもかかわらず、任務地としてギリシアではなくイタリアを割り当てられた^㉒。

たとえ、パウルスに対するギリシアへの任務地割り当てが意図的であったとしても、それはギリシアでの経験ゆえではなく軍事経験ゆえであることは明ら

かであろう。そして、パウルスを考察した結果として、パウルスと同様にフィリップスも、軍事経験こそが重要視されていたと言えるのではなかろうか。

このように、上記の4人のコンスルは対ギリシア外交の専門家であることを期待されて、任務地としてギリシアを割り当てられたとは考えにくいのである。

プラエトルの中にも、プラエトル就任以前にギリシアでの活動経験を持つ人物は存在する。厳密な意味でギリシアを任務地とした12人のプラエトルのうち、プラエトル就任以前にギリシアへ赴いたことのあると考えられる人物、は前191年のC.リウィウス＝サリナトル、前168年のCn.オクタウィウス、前148年のQ.カエキリウス＝メテルスの3人である。彼らは対ギリシアの専門家と見なされて、ギリシアを任務地として割り当てられたのであろうか。

前191年のプラエトルであるC.リウィウス＝サリナトルは、前199年に対マケドニアのために海軍を率いたとされている²⁰。しかしながら、彼がプラエトルになった際に海軍を率いていったのは、マケドニアではなくシリアである²¹。

前168年のプラエトルであるCn.オクタウィウスは、前年にギリシアで従軍経験があった。しかしながら、先にも述べたとおり、第3マケドニア戦争に従軍して上級公職者となり、任務地をギリシアとした人物は、先に挙げたQ.マルキウス＝フィリップスと、このCn.オクタウィウスだけである。さらに言えば、彼の本来の任務地は「海軍」classisであった²²。

前148年のプラエトルであるQ.カエキリウス＝メテルスは、第3マケドニア戦争における前168年のピュドナの戦いでのローマの勝利を本国に伝える使者の一人であった²³。しかしながら、彼が使者になった年とプラエトルになった年の間には、20年もの間隔がある。

以上のことから、上級行職への就任以前にギリシアでの経験を持つ上級公職者が、ギリシアを任務地としたことは、その上級公職者の就任以前の経験が重視されたゆえのことではない、と言えるであろう。確かに、Q.マルキウス＝フィリップスやCn.オクタウィウスのように、ギリシアでの活動経験が重視されたと想像しうる人物も存在する。それでも、全体的な傾向としては、上級公職者の任務地割り当てに際して、ローマの支配者層がその上級公職者のギリシアでの以前の経験を重視していたわけではないと言えるのである。

しかしながら、別表3から明らかなように、ギリシアを任務地とした上級公職者の多くは公職延長prorogatioを行っている。厳密な意味でギリシアを任務地とした上級公職者24人のうち、公職延長が認められた上級公職者は20人存在する。つまり、ギリシアを任務地とした上級公職者の大半が、ギリシアでの公職延長を認められたことになる。彼らはギリシアで経験を積んだことが考慮されたゆえに、公職延長が認められたことなのであろうか。

だが、20人のうち5人は後任者に公職を引き渡すまで駐留していただけであ

り、何ら活動は行っていない。さらに、5人は凱旋式を行うためのみに公職延長が認められたにすぎない。加えて、3人はギリシアにおいて終戦のための事後処理を行ってすぐに帰国している。つまるところ、20人のうち7人のみが、公職延長後においても実質的に活動を行ったにすぎないことになる。

その7人とは、前198年のコンスルであるT.クウインクティウス＝フラミニヌス、前192年のプラエトルであるA.セラヌスとM.タンピルス、前189年のコンスルであるM.フルウィウス＝ノビリオルとCn.マンリウス＝ウルソ、前149年と前148年のプラエトルであるP.ユウェンティウスとQ.カエキリウス＝メテルスである。

これらの人物はみなギリシアにおいて積極的な活動を行っている。しかしながら、これは、ローマの支配者層が彼らのギリシアでの活動を重要視していたことを、示すものではないと思われる。このことは、A.セラヌスとM.タンピルス以外の5人が公職延長を認められた年に選ばれた、正規の上級公職者の任務地から明らかである。と言うのは、それらの年の正規の上級公職者80人のうち、1人をのぞいて全員が、ギリシア以外、つまりガリア・リグリアやカルタゴなどを任務地としているからである^⑧。つまり、先に挙げたP.スルピキウス＝ガルバと同様に、ローマの支配者層はギリシアを重要視していなかったため、公職延長を認めた者たちにギリシアを任せていたにすぎないのである。

さらに言えば、ヒスパニアを任務地とした上級公職者も、その大半が公職延長を認められているのであり、公職延長は決してギリシアだけに限られた現象ではなかったのである^⑨。

このように公職延長を考察しても、全体的な傾向として、ギリシアでの経験者をローマの支配者層が活用しようとはしなかったと言えるし、ローマの支配者層が対ギリシア外交を特に重要視していたとも言い難いのである。

ここまでの考察によって、ローマの支配者層がギリシアに上級公職者を派遣する際や、公職延長を認める際に、特別な配慮をしたとは考えられないことは明らかである。ギリシアへ派遣された上級公職者の多くは、それ以前にギリシアでの経験がない者であったし、ギリシアでの経験を持つ者も、そのことのみが考慮されてギリシアへ派遣されていたわけではなかった。第1章で見たように、ギリシアへ派遣された上級公職者は数の上でも少なかったわけであり、そのことと併せて考えれば、ローマの支配者層が、対ギリシア外交に対して積極的であったとは言い難いと思われる。

だが、ローマの支配者層がギリシアに対して積極的でなかったならば、ギリシアに対して戦争を強硬に主張したり、積極的にギリシアで活動を行おうとした上級公職者の存在はどのように解釈すべきなのであろうか^⑩。こうした上級公職者たちが存在していたことは、ローマの支配者層がギリシア外交に対して

積極的ではなかったことと、矛盾するのではなからうか。そして、ローマの支配者層がギリシアを最重要視していなかったのならば、そのような上級公職者たちは、ギリシアでの活動にどのような重要性を見出していたのであろうか。

ここで重要になってくるのが、前2世紀前半のローマにおける政治社会の動向である。このことと照らし合わせれば、ローマの支配者層が積極的ではなかったにもかかわらず、対ギリシア外交に積極的な上級公職者が存在していたことは理解しうるものとなり得るはずである。

第3章 ローマの対ギリシア外交に対する政治社会の影響

本章では、前2世紀前半においてギリシアを任務地とした公職者たちのギリシアでの積極的な活動が、当時のローマの政治社会の事情を反映していたことを論じたい。まず、前2世紀前半のローマにおける政治社会全体の動向について押さえておく必要がある。

当時のローマの支配階級の内部に、流動性が存在していたことは重要である。近年に至るまで、共和政ローマの実体は少数の上流貴族であるノビリタス *nobilitas* による寡頭政であるというM.ゲルツァーの研究が優勢であった^③。しかしながら、1980年代に入って、P.A.ブラントやK.ホプキンスとG.バートンなどの研究によって、ごく限られた少数の氏族からなる、ノビリタスによる寡頭政的なローマの支配というゲルツァーの論は、揺るがされるに至っている^④。

これらの研究に対する反論もすでに出されている。しかしながら、この反論を行った研究者たちも、ローマの政治社会が、今まで考えられてきたような世襲的な貴族政でないことは認めている^⑤。

支配階級に流動性が存在していたにもかかわらず、第2ポエニ戦争の終結によって国政そのものは安定したことも重要である。第2ポエニ戦争時における危機的状況は、公職就任に関して原則を無視した措置を黙認することとなった。つまり、何度もコンスルに就く者が現れたり、正式な選挙を経ずにコンスルやプラエトルに就く者が現れたり、下級公職にすら就いたことがないにもかかわらず、いきなり上級公職に就く者が現れたり、正式な選挙を経ずに上級公職に就く者が現れたりした^⑥。

前197年以降にはこうしたことは行われなくなり、公職就任に関する暗黙の規則が生じる。これ以降は数少ない例外をのぞいて、第2ポエニ戦争時のような特殊な例が認められなくなる^⑦。

ここまでの論をまとめれば、前2世紀前半のローマにおいては有力な氏族に生まれた者も、有力な氏族出身というだけで政治社会で栄達することができたわけではなく、経験もなく要職に就くことの出来るような状況も過ぎ去り、功

績を立てねば政界で成功できない状況となっていた、と言えるであろう。

こうした支配階級の流動性と国政の安定に伴い、凱旋式の重要性が上昇したことが推察しうる。凱旋式には凱旋式triumphと小凱旋式ovatioがある。本稿が扱っている前2世紀前半において、これらを行っている上級公職者は延べ人数で46人いる(別表4参照)。紀元前2世紀始めには、これらがプラエトルに対しても認められるようになったことは重要である。というのは、プラエトルでありながらこれらを行った者は21人いるが、そのうちの14人が後にコンスルになっているからである⁹⁾。つまり、プラエトルにとって、凱旋式を行うことは、政治社会で成功するための重要な手段のひとつになったと言える。

残りの26人は、コンスルまたはプロコンスルとして凱旋式を行ったのであるが、そのうち12人は後にケンソルになっている。数だけ見れば、ケンソルに就くことのできた比率は低いように見えるが、ケンソル職は5年に一度しか選ばれない要職であり、前200年から前142年のケンソル28人のうち12人は凱旋式経験者である。さらに、そのうち10人は凱旋式が減少する前150年代以前の者であり、凱旋式が盛んに行われた時期である、前200年から前164年のケンソル16人のうち、10人が凱旋式経験者ということになる。加えて、落選はしたものの、ケンソル職に立候補した凱旋式経験者は多数存在していた¹⁰⁾。

このように、前2世紀前半のローマにおいて、凱旋式を行うことは、政治社会で成功するための重要な手段のひとつであったと言える。

凱旋式の重要性が増したと共に、対外戦争に伴う経済的な利益も増加した。この頃の戦利品の分配は、戦地に派遣された上級公職者に任されており、莫大な戦利品を取得することも可能であった¹¹⁾。それ故に、海外で戦争を行うことは、当時のローマにおける支配階級全体にとってだけではなく、成功を望む個々の人間にとっても重要なものであったといえる。

これに対して、政治的成功を望む人間を押さえつけようとする動きも生じた。例えば、対外戦争に成功した人物が、ローマにおいて訴えられることが行われることが増加していく¹²⁾。スキピオ兄弟の裁判はその端的な例である。また、上級公職者が凱旋式を行うことは、その人物の政治的宣伝に成り得るものであることはすでに触れたが、その凱旋式が許可されない者が存在した。さらに、凱旋式を行うためには、軍隊を任務地から撤退させることと、ある程度以上の戦果を挙げることといった条件も必要とされるようになっていく。加えて、前170年以降はその数も減少していく¹³⁾。

ここまでの論をまとめると、前2世紀前半のローマの政治社会は以下のような状況にあったと推察しうる。つまり、当時のローマは第2ポエニ戦争の危機が去って、外部との戦争は盛んであったが、国政的には比較的安定した状態にあった。そうした状況の中で政治社会において成功していくためには、共和

政成立期のように家や氏族の援助に頼るだけではなく、対外戦争での成功や凱旋式の挙行といった政治的成功を必要とした。しかしながら、そうした成功によって必要以上に力を持つに至った者を、押さえようとする動きも生じていた。

このような状況は、ローマの支配者層が決して積極的ではなかった当時の対ギリシア外交にも当てはまるであろう。つまり、ギリシアでの戦争を主張したり実行したりする上級公職者たちは、「ギリシア」での戦争を望んでいたのではなく、ギリシアでの「戦争」と、それによる「戦果」とを望んでいたにすぎないと思われる。ここでは、本章でも取り上げた、凱旋式の問題と絡めた具体的な例を特に挙げてみたい。

第2マケドニア戦争期である、前196年のコンスルのM.クラウディウス＝マルケルスは、任務地としてギリシアを受け持つことを要求したのであるが、元老院に拒否されてイタリアを任務地とさせられた^⑩。その後、マルケルスは北イタリアでの戦争に勝利して凱旋式を行った。これらのことから、当時の元老院がギリシアに対して積極的ではなかったことと、マルケルスはギリシアでの戦争の継続が重要と考えていたのではなく、戦地において実績を作ることを望んでいたにすぎないことが見て取れるであろう。

その当時のギリシアでは、T.クウインクティウス＝フラミニヌスは数年間に渡って公職延長を行って、スパルタの王であるナビスとの戦争を行っていたのであるが、前194年には和平を行い、ギリシアから軍を完全に撤退させて凱旋式を行った。この際に、ギリシア人たちが不満を示したにもかかわらず、スパルタのナビス政権を存続させて戦争を終結させている。

フラミニヌスが、どのような考えに基づいてこのような行動をしたのかについては、これまで膨大な数の研究がなされているが、それぞれ見解は違っているが、その多くは、ギリシアの事情を考慮した上でのフラミニヌスによる対ギリシア戦略の一環として、これらの行動を位置づけている^⑪。もちろん、フラミニヌス自身に、ギリシアに対する何らかの配慮があったことは事実であろう。しかしながら、フラミニヌス自らの栄誉のために活動を行っていたことも事実であり^⑫、加えて、本章で見た当時のローマの政治社会の状況を考慮すれば、凱旋式を視野に入れた考察が不可欠であると思われる。

そもそも、フラミニヌスは自分の後任がギリシアへと派遣されて、自分の業績が失われることを常に恐れていた^⑬。さらに、シリアの動向に加えて、シリアに亡命していたハンニバルと、彼の母国であるカルタゴとが、それに合わせてどのように動くかを恐れた元老院は、新たに上級公職者を派遣しようとしていた^⑭。もしそうなれば、ギリシアにはローマ軍が存在し続けることになり、フラミニヌスは凱旋式を行うことが出来なくなってしまう。凱旋式を挙げるための条件として、任務地を平定して軍を撤退させることがあったことは、先に見た

とおりである。だからこそ、こうしたことを察したフラミニヌスは、ギリシアでの戦争を急いで終結させて、ローマへと帰ったのではなかろうか。

シリア戦争末期にも凱旋式を意識した行動が行われていた。前189年のコンスルであるCn.マンリウス＝ウルソは、任務地として小アジアを担当したが、シリア戦争とは直接関係のないガラティア征伐を行った。彼が派遣される頃にはシリア戦争はほぼ終結しており、事後処理を残すのみであった。それ故に、彼は何らかの実績を作らねば凱旋式を行うことが出来ないため、ガラティア征伐によって無理に実績を作ったと推察しうるのはなかろうか。彼は帰国後に凱旋式を行うことに対して反対を受けるのであるが、その理由の要因は対シリアと直接には関係のない戦争を行ったためであった^⑩。

ウルソと同じく前189年のコンスルであり、アイトリアを任務地としたM.フルウィウス＝ノビリオルに関して、同様のことが言える。アイトリアでの勝利に対する凱旋式はすでにM'.アキリウス＝グラブリオによって行われており、ノビリオルがアイトリアを任務地としたのは、ギリシアで不穏な噂が流れたためであった^⑪。従って、シリア戦争はギリシア本土でもほぼ終結しており、ノビリオルが凱旋式を行うためには、何らかの功績を立てねばならなかった。その後、ノビリオルも前187年に凱旋式を行っているのであるが、略奪と虐殺ゆえに凱旋式の挙行に異議を唱えられている^⑫。この略奪と虐殺もまた、凱旋式を行うためのものであることは推察に難くない。

ごくわずかな例だけを見ただけであるが、ギリシアにおいて積極的な活動を欲したり行ったりした者は、ギリシアを重要視しているというよりも、ギリシアにおいて功績を立てることを望んでいたにすぎないことは、確認しうられる。だからこそ、ギリシア側の意向を重要視せずに戦争を終結させたり、ギリシアで必要以上の戦争や略奪も行われていたと言えるであろう。

このように、前2世紀前半のローマでは、政治社会で栄達して行くには政治的成功を立てるの必要があり、ギリシアはその場の一つであるにすぎず、ローマの支配者層が、ギリシアを特別に重要視していたわけではなかったのである。

結 論

本稿では、前2世紀前半にギリシアへ派遣された上級公職者の考察を行うことによって、ローマによる、対ギリシア外交の再考察を行った。これによって、前2世紀前半のローマの支配者層は対ギリシア外交を最重要視していたわけではなく、積極的に関わった者たちも、ギリシアそのものを重要視したためではなく、ローマの政治社会で勢力を伸ばすために、対ギリシア外交を活発に行っていたことを明らかにした。

ただし、第3章で行ったローマの政治社会の状況と、対ギリシアが外交との関係の検証はまだまだ不十分なものであり、さらなる考察が必要であろう。さらに、本稿におけるローマによる対ギリシア外交の再考察を踏まえた上での、東地中海の諸王国・諸都市・諸同盟に関する考察の必要性があるであろう。加えて、当時のローマがギリシアよりも多くの上級公職者を派遣していた、イタリアやスペインに対する外交との関係を検証することも必要であろう。

本稿においては、上級公職者の考察しか行わなかったが、ギリシアには彼らだけではなく多くの使者が送られていたことは事実であり、一概に、対ギリシア外交にローマが積極的ではなかったとは考え難いと言えるかもしれない。それでも、第1章で明らかにしたように、当時のコンスルの殆どはイタリアを任務地としていたこともまた事実である。つまり、より重要なイタリアには上級公職者を派遣して、重要性が低いギリシアには使者を派遣していたのではなかろうか。筆者はこのように考えているが、ギリシアに派遣された使者やイタリアの重要性に関する考察は今後の課題として、別の機会に論じてみたい。

註

- ① 研究史として、最近のものでは以下のような論文がある。 E.Frézouls, “Sur l’historiographie de l’impérialisme romain,” *Ktema* 8(1983), 141-62; R.M. Errington, “Neue Forschungen zu den Ursachen der römischen Expansion im 3. und 2. Jahrhundert v.Chr.,” *Historische Zeitschrift* 250(1990), 93-106; J.Rich, “Patronage and International Relations in the Roman Republic,” in A.Wallace-Hadrill ed. *Patronage in Ancient Society* (Routledge, 1990), pp.117-35.
- ② G.Clemente, “Esperati ambasciatori del senato e la formazione della politica estera romana tra il III e il II secolo a.C.,” *Athenaeum* 54(1976), 319-52; E.S.Gruen, *The Hellenistic World and the Coming of Rome* (University of California Press, 1984), pp.203-49. (以下、本書をHWCRと略す)
- ③ なお紙幅の都合上、本稿においては、選挙によって選ばれた正式な上級公職者のみを考察の対象とし、臨時に任命された上級公職者については考察の対象としない。これらの考察に関しては後の機会に譲りたい。
- ④ provinciaという単語は、前2世紀前半の段階においては限定された領土という意味はなかった。従って、本稿においてprovinciaは「任務地」と訳す。 Cf. A.Lintott, “What Was the ‘Imperium Romanum’?,” *G&R* 28(1981), 54-61.
- ⑤ T.R.S.Broughton, *The Magistrates of the Roman Republic* (American Philological Association, 1951), I, 438-70. (以下MRRと略す) 前168年に、ロー

マはマケドニア王国を廃止したのであるが、少なくとも前148年までは、定期的に上級公職者を派遣することはなかったと思われる。Cf. F.Papazoglou, "Quelques aspects de l'histoire de la province de Macédonia," *ANRW* II.7.1(1979), 302-12.

- ⑥ Liv.xl.18.4; cf. Weiss, "Histria," *RE* I-16(1913), 2114f.; H.J.Dell, "Demetrius of Pharos and the Istrian War," *Historia* 19(1970), 34.
- ⑦ App.III.11; Flor.i.25; Liv.Per.57; Pol.xxxii.9.1-5; cf. J.J.Wilkes, *Dalmatia* (Routledge, 1969), pp.29-32; P.A.Brunt, *Italian Manpower 225 B.C.-A.D. 14* (Oxford, 1971), pp.426-34; W.V.Harris, *War and Imperialism in Republican Rome 327-70 B.C.* (Oxford, 1979), p.233f. W.V.ハリスはローマの攻撃性を強調しているが、ダルマチア戦争をギリシア征服とは結びつけてはいない。
- ⑧ F.Millar, "The Political Character of the Classical Roman Republic, 200-151 B.C.," *JRS* 74(1984), 3.
- ⑨ A.Psserini, "I moventi di Roma nella seconda guerra macedonica," *Athenaeum* 9(1931), 551; M.Gelzer, "Die Anfänge des römischen Weltreichs," in *Das Reich, Idee und Gestalt* (Stuttgart, 1940), S.13; H.H.Sculard, *Roman Politics, 220-150B.C* (Oxford, 1951), p.92; J.P.V.D. Balsdon, "Rome and Macedon, 205-200 B.C.," *JRS* 44(1954), 37; E.Badian, *Foreign Clientelae (264-70 B.C.)* (Oxford, 1958), p.63; R.Werner, "Das Problem des Imperialismus und römischer Ostpolitik in zweitem Jahrhundert v.Chr.," *ANRW* I.1(1972), 543; Clemente, *op.cit.*, p.329; R.M.Errington, "Rome against Philip and Antiochus," *CAH²* VIII(1989), 255.
- ⑩ 前210年から前207年までのイタリアにおける危機的状況と、指揮官の不足についてはM.L.Patterson, "Rome's Choice of Magistrates during the Hannibalic War," *TAPhA* 73(1942), 330-34を参照のこと。
- ⑪ Cf.E.Ettlinger, "Villius," No.10, *RE* II-16(1958), 2166-71; Gruen, *HWCR*, p.206f.
- ⑫ Liv.xxxvi.21.7-9
- ⑬ Liv.xxxvii.1.7-10; cf. App.Syr.21.
- ⑭ Liv.xxxvii.51.8-10; cf. Gruen, *HWCR*, p.217f.
- ⑮ Pol.xxiii.9.4-14, xxiv.9.12; Liv.xl.2.6-8; cf. J.A.Briscoe, "Q.Marcus Philippus and Nova Sapientia," *JRS* 54(1964), 66f.; Gruen, *HWCR*, p.235f.
- ⑯ Broughton, *MRR*, I, 405-38.
- ⑰ F.Münzer, "Marcus," No.79, *RE* I-28(1930), 1573-79.

- ⑱ Cf. P.S.Derow, "Rome, the Fall of Macedon and the Sack of Corinth," *CAH*² VIII(1989), 310f. 加えて、劣勢に立たされたローマは、さらなる徴兵も行っている(Liv.xliii.14.1-10.)。
- ⑲ Plut.*Aem.Pau.*, 10; Liv.xliv.17.6-10.
- ⑳ Liv.xxxviii.44.9, 47.1, xxxix.32.6; Pol.xxii.24.9, 16.17.
- ㉑ Liv.xlii.58.12. リキニウスは第3マケドニア戦争において物資の補給の任務や兵の徴集をイタリアで行ったが(Liv.xliv.17.10, 19.5, 21.11, 22.5.)、ピュドナの戦いの終了後には任務を解かれてガリアへと向かった(Liv.xlv.12.9-12.)。
- ㉒ Liv.xxxii.16.4; cf. Broughton, *MRR*, I, 329 and 332.
- ㉓ Broughton, *MRR*, I, 353; cf. F.Münzer, "Livius," No.29, *RE*, I-25(1926), 888-90.
- ㉔ Liv.xliv.17.10; Diod.xxxi.8.10; Vell.Pat.i.9.4; Zon.ix.23.
- ㉕ Liv.xliv.45.3, xlv.1.1.
- ㉖ フラミニヌス(197-194 B.C.): Broughton, *MRR*, I, 332-43. ノビリオル、ウルソ(188-186 B.C.): *Ibid.*, I, 332-343. ユウエンティウス、メテルス(148-146 B.C.): *Ibid.*, I, 332-343. 唯一の例外は、前146年のコンスルであるL.ムンミウスのみである。
- ㉗ W.F.Jashemski, *The Origins and History of the Proconsular and the Proprætorian Imperium to 27 B.C.* (The University of Chicago Press, 1950), pp.41-47 and 122-28.
- ㉘ Cf. J.A.Briscoe, "Rome and the Hellenistic World," *CR* 36(1986), 91-96.
- ㉙ M.Gelzer, "Die Nobilität der römischen Republik," in *Kleine Schriften* (Franz Steiner, 1962), I, i.b. 59-61, 121-32 und 134f.
- ㉚ P.A.Brunt, "Nobilitas and Novitas," *JRS* 72(1982), 1-17; K.Hopkins and G.Burton, "Political Succession in the Late Republic (249-50BC)," in K.Hopkins, *Death and Renewal* (Cambridge, 1983), pp.31-119.
- ㉛ A.E.Astin, "Roman Government and Politics 200-134 B.C.," *CAH*² VIII (1989), 163-96; L.A.Burckhardt, "The Political Elite of the Roman Republic: Comments on the Recent Discussion of the Concept Nobilitas and Homo Novus," *Historia* 39(1990), 77-99; J.A.North "Democratic Politics in Republican Rome," *Past & Present* 126(1990), 3-21. ブルクハルトの次の言葉はこれを特に象徴していると思われる。「この〔プラントやホプキンズの〕研究は、ノビリタスといえども政治的成功が保証されていないことを証明した」(Burckhardt, *op.cit.*, p.88. □内は引用者註)。
- ㉜ Jashemski, *op.cit.*, pp.17-39; G.Rögler, "Die Lex Villia annalis," *Klio* 40(1962), 86-102.

- ③ Röglér, a.a.O., S.103f.; Millar, *op.cit.*, p.1f.
- ④ J.S.Richardson, "The Triumph, The Praetors and the Senate in the Second century B.C.," *JRS* 65(1975), 52-57; R.Develin, "Tradition and the Development of Triumphal Regulation in Rome," *Klio* 60(1978), 435; Harris, *op.cit.*, p.32 and 262f.
- ⑤ 189 B.C.: Liv.xxxvii.57.10. 184 B.C.: Liv.xxxix.40.2-3. 169 B.C.: Liv.xliii.14.1. なお、これ以外の年については史料に明記されていないため不明である。
- ⑥ I.Shatzman, "The Roman General's Authority over Booty," *Historia* 21(1972), 177-205; cf. Harris, *op.cit.*, pp.54-104.
- ⑦ E.S.Gruen, "The Exercise of Power in the Roman Republic," in *City States in Classical Antiquity and Medieval Italy* (The University of Michigan Press, 1991), pp.262-67.
- ⑧ Richardson, *op.cit.*, pp.58-63; Develin, *op.cit.*, p.434f. and 436; E.S.Gruen, "The Fall of Scipio," in *Leaders and Masses in the Roman World* (E.J.Brill, 1995), pp.60-66.
- ⑨ Liv.xxxiii.15.4-11.
- ⑩ Liv.xxxiii.37.9-12.
- ⑪ Liv.xxxiv.41.4-7, 48.5-6; Plut.*Flam.*13; cf. Liv.xxxiv.26.12-14, 33.9-34.9; Diod.xxviii.13.
- ⑫ 例えば、次のような研究が挙げられる。Scullard, *op.cit.*, p.100 and 119; Badian, *op.cit.*, p.81f.; F.Cassola, "La politica di Flaminio e gli Scipioni," *Labeo* 6(1960), 118-26; A.J.Toynbee, *Hannibals's Legacy* (Oxford, 1965), II, 451f.; J.A.Briscoe, "Flamininus and Roman Politics, 200-189 B.C.," *Latomus* 31(1972), pp.32-38 and 42-47; J.-L.Ferrary, *Philhellénisme et impérialisme* (Ecole française de Rome, 1988), pp.96-112.
- ⑬ Cf. Harris, *op.cit.*, p.142 and 218; Gruen *HWCR*, pp.448-56; A.M.Eckstein, *Senates and General* (University of California Press, 1987), p.274, 277 and 306f.
- ⑭ Liv.xxxiv.33.14; Pol.xviii.39.4; Plut.*Flam.*13.
- ⑮ Liv.xxxiii.45.3-5; cf. Diod.xxviii.10.
- ⑯ Liv.xxxviii.44.9-50.3; Flor.I.27; cf. B.Pagnon, "Le Récit de l'expédition de Cn. Manlius Vulso contre les Gallo-Grecs et de ses prolongements dans le livre 38 de Tite-Live," *LEC* 50(1982), 115-28; Harris, *op.cit.*, pp.223-25.
- ⑰ Liv.xxxvii.46.2-6, 48.1-7.
- ⑱ Liv.xxxviii.43.3-5; cf. F.Münzer, "Fulvius," No.91, *RE* I-13(1910), 265-67.

別表1 前200年から前166年までのコンスルの任務地

	イタリア(ガリア・リグリアを含む)	ギリシア(マケドニア・小アジアを含む)	サルディニア	ヒスパニア	不明	合計
人数	55	14	1	1	2	73
パーセント	75.3	19.2	1.4	1.4	2.7	100.0

※コンスルの実際の人数は71人であるが、任務地を2ヶ所担当している人物が2人いるために、延べ人数は73人となる

別表2 前200年から前166年までのプラエトルの任務地

	都市プラエトル	外国人専門プラエトル	近ヒスパニア	遠ヒスパニア	シチリア	サルディニア	合計
人数	33	33	23	23	31	29	172
パーセント	15.3	15.3	10.6	10.6	14.4	13.4	79.6

	イタリア諸都市	海軍(東地中海)	ガリア	イストリア	イルリュリア	不明	合計
人数	10	9	7	1	1	16	44
パーセン	4.6	4.2	3.2	0.5	0.5	7.4	20.4

※プラエトルの実際の人数は203人であるが、任務地を2ヶ所担当している人物が13人いるので、延べ人数は216人となる

別表3 ギリシアを任務地とした上級公職者

() は任務地、* は公職延長を、' は公職延長後に凱旋式のみを行った者)

コンスル 17人

- 前200年 P.スルピキウス=ガルバ(マケドニア*)
- 前199年 P.ウィリウス=タップルス(マケドニア*)
- 前198年 T.クウインクティウス=フラミニヌス(マケドニア*)
- 前191年 M'.アキリウス=グラブリオ(ギリシア*)
- 前190年 L.コルネリウス=スキピオ=アジアティクス(ギリシア*)
- 前189年 M.フルウィウス=ノビリオル(アイトリア*)
- Cn.マンリウス=ウルソ(小アジア*)
- 前178年 M.ユニウス=ブルトゥス(リグリア、イストリア*)
- A.マンリウス=ウルソ(ガリア、イストリア*)
- 前177年 C.クラウディウス=プルケル(リグリア、イストリア*)
- 前171年 P.リキニウス=クラスス(マケドニア)

前170年 A.ホスティリウス＝マンキヌス(マケドニア*)
 前169年 Q.マルキウス＝フィリップス(マケドニア*)
 前168年 L.アエミリウス＝パウルス(マケドニア*)
 前156年 C.マルキウス＝フィグルス(ダルマティア)
 前155年 P.コルネリウス＝スキピオ＝ナシカ(ダルマティア)
 前146年 L.ムンニウス(アカイア*)

プラエトル 13人

前192年 A.アティリウス＝セラヌス(ヒスパニア、海軍*)
 M.バエビウス＝タンピルス(ヒスパニア、海軍*)
 前191年 C.リウィウス＝サリナトル(海軍*)
 前190年 L.アエミリウス＝レギルス(海軍*')
 前189年 Q.ファビウス＝ラベオ(海軍*')
 前181年 L.ドゥロニウス(アプリア、イストリア*)
 前171年 C.ルクレティウス＝ガルス(海軍)
 前170年 L.ホルテンシウス(海軍)
 前169年 C.マルキウス＝フィグルス(海軍)
 前168年 L.アニキウス＝ガルス(イリュリア*)
 Cn.オクタウィウス(海軍*')
 前149年 P.ユウウェンティウス(マケドニア*)
 前148年 Q.カエキリウス＝メテルス＝マケドニクス(マケドニア*)

別表4 凱旋式を行った上級公職者(前200-前145年)

((○)は任務地、<>は凱旋式後の経歴、*は公職延長を、'は小凱旋式を行った者)

コンスル 26人

前197年 C.コルネリウス＝ケテグス(イタリア)<cens.194>
 Q.ミヌキウス＝ルフス(イタリア)'
 前196年 M.クラウディウス＝マルケルス(イタリア)<cens.189>
 前194年 M.ポルキウス＝カトー(ヒスパニア)*<cens.184>
 T.クウインクティウス＝フラミニヌス(ギリシア)<cens.189>
 前191年 P.コルネリウス＝スキピオ＝ナシカ(イタリア)
 前190年 M'.アキリウス＝グラブリオ(ギリシア)*
 前189年 L.コルネリウス＝スキピオ＝アジアティクス(小アジア)*
 前187年 M.フルウィウス＝ノビリオル(ギリシア)*<cens.179>
 Cn.マンリウス＝ウルソ(小アジア)*
 前181年 L.アエミリウス＝パウルス(リグリア)*<cos.168, cens.164.>
 前180年 M.バエビウス＝タンピルス(リグリア)*
 P.コルネリウス＝ケテグス(リグリア)*

- 前179年 Q.フルウィウス=フラックス(リグリア)<cens.174>
 前177年 C.クラウディウス=プルケル(イストリア)<cens.169>
 前175年 M.アエミリウス=レビドゥス(リグリア)
 P.ムキウス=スカエウォラ(リグリア)
 Ti.センプロニウス=グラックス(ヒスパニア)*<cos.163, cens.169>
 前167年 L.アエミリウス=パウルス(マケドニア)*<cens.164>
 前166年 M.クラウディウス=マルケルス(ガリア)<cos.155,152>
 C.スルピキウス=ガルス(リグリア)
 前158年 M.フルウィウス=ノビリオル(リグリア)*
 前155年 P.コルネリウス=スキピオ=ナシカ(ダルマティア)
 M.クラウディウス=マルケルス(リグリア)<cos.152>
 前146年 P.コルネリウス=スキピオ=アフリカヌス(カルタゴ)*<cens.142>
 前145年 L.ムンミウス(ギリシア)*<cens.142>

プラエトル 21人

- 前200年 L.フリウス=ブルプリオ(ガリア)<cos.196>
 前195年 M.ヘルウィウス(ヒスパニア)*'
 Q.ミヌキウス=テルムス(ヒスパニア)*<cos.193>
 前191年 M.フルウィウス=ノビリオル(ヒスパニア)*'<cos.189, cens.179>
 前189年 L.アエミリウス=パウルス(ヒスパニア)*<cos.182,168, cens.164>
 L.アエミリウス=レギルス(海軍)*
 前188年 Q.ファビウス=ラベオ(海軍)*<cos.183>
 前185年 L.マンリウス=アキディヌス(ヒスパニア)*'<cos.179>
 前184年 C.カルプルニウス=ピソ(ヒスパニア)*<cos.180>
 L.クウインクティウス=クリスピヌス(ヒスパニア)*
 前182年 A.テレンティウス=ウェアロ(ヒスパニア)*'
 前180年 Q.フルウィウス=フラックス(ヒスパニア)*<cos.179, cens.174>
 前178年 L.ポストゥミウス=アルビヌス(ヒスパニア)*<cos.173>
 前178年 Ti.センプロニウス=グラックス(ヒスパニア)*<cos.177,163, cens.169>
 前175年 M.ティティニウス=クルウス(ヒスパニア)*
 前174年 Ap.クラウディウス=ケント(ヒスパニア)*'
 前172年 C.キケレイウス(コルシカ)*'
 前167年 L.アニキウス=ガルス(イリュリア)*<cos.160>
 Cn.オクタウィウス(海軍)*<cos.165>
 前152年 L.ムンミウス(ヒスパニア)*<cos.146, cens.142>
 前146年 Q.カエキリウス=メテルス(マケドニア)*<cos.143>

(関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程